

てん菜単胚種の採種に関する研究

第1報 採種量ならびに開花,結実特性

山本保・安部秀雄・川北暁司

数品種(系統)の単胚種について採種量を調査し, GW-monogerm については開花,結実特性を調査した結果次のことが判明した。

1. GW-monogerm の抽苔期はつきさっぷよりやや早い傾向を示し,草丈も高くなった GW-monogerm の開花期は5月上旬に始まり,最盛期は5月下旬になるが特につきさっぷに比し後期まで開花が旺盛であった。その他現地試験の単胚種では,E~6(多胚種)に比して開花期および成熟期が幾分遅れる傾向であった。しかし開花株率は95%以上であり,暖地での採種は容易であると考えられた。

2. 現地試験による単胚種の株当り採種量は30~40gのものが多く,厳密な比較はできないが E~6 の28.0gと大差なかった。

GW-monogerm のアール当り採種量は26.5Kgで,つきさっぷの32.5Kgに比し約13%多くなった。これに対し採種粒数では GW-monogerm がアール当り233万粒でつきさっぷの167万粒に比し,約40%多く個体当り調査でも同様に GW-monogerm は株当り結果粒数が2,397でつきさっぷより38%多くなった。

3. 千粒重は GW-monogerm(9月5日まき)が11.5gでつきさっぷは19.5gであった。その他の現地試験の単胚系統では8.4~9.4gで比較的小粒であり,特に MS — monogerm は7.0gで小さかった。(対照の E~6 は18.0g)

4. GW-monogerm の発芽率は78~81%で,つきさっぷの92~95%に比して低かった。この点についてはさらに多胚種の開花数と稔性との関係および単胚種の開花期別稔性等について今後検討する必要がある。

5. 本試験で主に用いた GW-monogerm では単胚率が86.5%でやや低いが,他の単胚種では94~98%のものが多かった。GW-monogerm の中で digerm を除き,また発芽率から単胚発芽粒数を求めるとつきさっぷとほぼ同数になった。

以上の諸点から単胚種の採種栽培においては単胚率,発芽率および採種粒数から採種量を判定し,経済性を考慮する必要があると考えられる。